

旧三国街道

歴史ある三国街道

三国街道は、かつて本州の内陸部と日本海を結ぶ賑やかな交易・旅行路でした。現在の群馬県にある高崎市から、現在の長岡市にある海岸沿いの町、寺泊までの約 200 キロの道のりです。途中には 35 の宿場があり、旅人は茶屋で食事や休憩をとり、旅籠で一泊し、新しい馬に乗り換え、船宿と契約して荷物を送ったりしました。江戸時代（1603 年～1867 年）には、宗教的な巡礼をする庶民や、遠方の市場へ向かう商人、江戸（現在の東京）へ公式の行列をする大名など、多くの人々がこのような街道を旅しました。

寺泊は三国街道の北の終点であると同時に、北陸地方（現在の福井県、石川県、富山県、新潟県）の日本海沿岸を東西に走る北陸道（通称名：北国街道）の宿場町でもありました。三国街道の南端である高崎は、幕府の行政の中心地である江戸と当時首都であった京都を結ぶ五街道のひとつ、中山道の宿場でした。そのため三国街道は、大都市を目指す人々にとって重要なルートでした。

摂田屋の三国街道

1605年頃、佐渡金山の輸送のため江戸幕府が本格的に三国街道を整備しはじめました。

この街道は摂田屋地区を通り、摂田屋地区は長岡藩ではなく幕府の直轄地でした。江戸へ向かう大名行列は、将軍への敬意を示すため駕籠を降りて摂田屋の三国街道を歩いたと言われています。江戸時代以降の住宅建設や道路建設により、かつての交易路の大部分は見えなくなりましたが、数百年の歴史を持つ商店の間を通る狭い区間には、今も形が残っています。

この街道の区間への入口は、越のむらさき醤油醸造所と小さな竹駒稻荷神社の間に位置しています。醸造所の建物の横には、約200年前から旅行者の守り神である地蔵菩薩の石像があります。この地蔵像は道標としても機能しており、台座には「右は江戸、左は山道」と刻まれています。この石畳の道を進むと、醤油や日本酒の醸造の独特な香りや、発酵プロセスに使う麹菌によって長年さらされた黒ずんだ木製の壁に気付くことでしょう。

三国街道の保存区間は摂田屋地区の長い歴史の一端を担ってきた場所を通ります。越のむらさき醤油醸造所、吉乃川酒造、天下甘露泉の水がくみ上げられる井戸、金刀比羅神社につながる道などが含まれています。